



戦前に執筆された、逗子が

登場する作品を知りたい

明治 22 年の横須賀線逗子駅の開業により別荘や貸間が増え避暑・静養地として知られるようになった逗子。

かつて田越川沿いにあった旅館「柳屋」で過ごした徳富蘆花は『自然と人生』『不如帰』で、逗子の自然の美しさに言及しました。

療養のため逗子に滞在した泉鏡花は『春昼』『月夜遊女』など逗子を舞台とした物語を発表しました。

これらの文学作品を通して、より広く、より多くの人に逗子の名は広まりました。

◆そのほか◆

本の情報	請求記号
『鎌倉・逗子一文壇資料一』 巖谷大四著 講談社 1980	Z 90.K イ
『湘南文学 第2号 特集:泉鏡花と逗子そして金沢』 湘南文学編集委員会編集 1991	P910.5 シ 2
『文学にみる「逗子」 [1]』 森谷定吉著 モリヤ 1999	P910 モ 1
『湘南文学 第 14 号 特集:永井荷風』 湘南文学編集委員会編集 2001	Z 90.A シ 14
『逗子雑記 逗子の季寄せ 逗子の文学』 森谷定吉著 モリヤ 1992	Z 29.Z モ
『泉鏡花展—ものがたりの水脈—』 神奈川文学振興会編集 神奈川近代文学館 2013	P910 イ
『徳富蘆花 新装版』 岡本正臣著 福田清人／編 清水書院 2018	Z 91.Z オ
『論集泉鏡花 第 7 集』 泉鏡花研究会編 和泉書院 2022	910 ロ 7
『徳富蘆花 —天性に順ひ、眼光に依頼せよ—』 半藤英明著 ミネルヴァ書房 2022	910 ハ

図書館探偵

レファレンス事例 No.11

2023 年 11 月発行

逗子が登場する
文学～戦前篇～



不如帰の碑

写真：逗子フォトより

逗子市立図書館

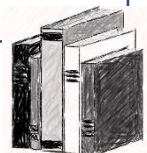
046-871-5998

逗子市に関するレファレンス事例は、逗子市立図書館ホームページで閲覧できます。

<https://www.library.city.zushi.lg.jp>

本の情報・返子が登場する文章の抜粋	請求 記号
<p>『小説仕入帳』 小杉天外著 中央公論社 1941</p> <p>地味が豊かなのであらう、返子では、路傍の雑草までが、花の色までが濃いやうな気がする。垣根もない農家の庭などに、勿體ないばたんが美しくさいてみたり、手数のかかる菊が作られてみたりすると、生業で一杯になつてゐる時間を割いても、手近に花を眺めてみたい主人の意を考へて微笑をする。</p>	918.6 コ
<p>『草迷宮』 初出：春陽堂(1908) 泉鏡花作 山本タカト画 エディション・トレヴィル 2014</p> <p>三浦の大崩壊を、魔所だという。 葉山一帯の海岸を屏風で割った、桜山の裾が、見も馴れぬ獣の如く、洋へ躍込んだ、一方は長者園の浜で、返子から森戸、葉山をかけて、夏向き海水浴の時分、人死のあるのは、この辺では此処が多い。</p>	ZY F I
<p>『二、三羽 - 十二、三羽』 初出：雑誌「女性」 『鏡花短篇集』 大正 13 年 4 月号(1924) 泉鏡花著 川村二郎編 岩波書店 1987 所収</p> <p>「以前、あしかけ四年ばかり、相州返子に住った時(三太郎)と名づけて目白鳥がいた。桜山に生れたのを、おとりで捕った人に貰ったのであった。</p>	ZY F I

返子市立図書館に所蔵している本の一部をご紹介します。



本の情報・返子が登場する文章の抜粋	請求 記号
<p>『欺かざるの記(抄)』 初出：隆文館(1908) 『新日本古典文学大系—明治編—28』 国木田独歩著 中野三敏[ほか]編集委員 岩波書店 2006 所収</p> <p>十九日、信子と共に返子に幽居す。以後記する処は幽居の日記及び感想なり。十九日の朝、徳富猪一郎氏より相談あれば来れとの葉書到着せしかば直ちに訪問したり。</p>	N 918 シ 28
<p>『冷笑』 初出：東京朝日新聞(1910) 『荷風全集 第7巻』 永井壮吉著 岩波書店 1992 所収</p> <p>～その上に広がる晴れた空は月の夜のやうに明るく、鮮明な星の数は一ツ残らず、折から渡る田越川の水の面に浮んでみた。</p>	918.6 ナ 7
<p>『返子より』 初出：雑誌「饒舌」第一号(1902) 『荷風全集 第2巻』 永井壮吉著 岩波書店 1993 所収</p> <p>湖山大兄……………返子は御存じの如く氣候暖く候故、屋後の梅花已に綻び、門前の柳枝も青き眉を作らんと致し居り候、～</p>	918.6 ナ 2
<p>『自然と人生』 初出：民友社(1900) 徳富蘆花著 岩波書店 2005</p> <p>秋だ。秋だ。實に秋だ、つい背後の返子の山々も、心から少し蔭色になつた様だ。不動様の邊りに頻に百舌鳥の鳴くのが聞へる。葉山から返子の停車場に通ふがた馬車の喇叭の音が聞へる。</p>	ZY 914.6 ト
<p>『不如帰 改版』 初出：「國民新聞」(1898) 徳富蘆花作 岩波書店 2012</p> <p>返子の別荘にては、武男が出発後は、病める身の心細さやるせなく思うほどいよいよ長き日一日のさすがに暮らせば暮らされて、はや一月あまりたちたれば、麦刈り済みて山百合咲くころとなりぬ。</p>	ZY F ト

本の情報・返子が登場する文章の抜粋	請求 記号
<p>『雪を待つ』 『池谷信三郎全集』 池谷信三郎著 改造社 1934 所収</p> <p>今は返子にゐるので天気が良いと大概毎日スカアルに乗つてゐる。返子ホテルの岩下氏は何しろ漕艇界の元老なので、そのコーチよろしきを得て、近ごろは平気で葉山の先まで往復する。</p>	918.6 イ
<p>『海水浴』 初出：雑誌「文藝春秋」8月号(1935年) 『寺田寅彦全集 第10巻』 寺田寅彦著 岩波書店 1961 所収</p> <p>返子養神亭から見た向こう岸の低い木柵にもたれている若い女の後ろ姿のスケッチがある。つば広の藁帽をあみだにかぶってあちら向いて左の手で欄の横木を押えている。</p>	081 テ 10
<p>『返子物語』 初出：雑誌「新青年」 昭和 12 年 8 月号(1937) 『蒲団—橋外男日本怪談集—』 橋外男著 中央公論新社 2022 所収</p> <p>これが諸君にお話しようとするこの怪奇な物語の起つた返子の了雲寺の全貌であつたが、これだけの構えをしている以上もちろん昔は相当に寺格の高い由緒ある寺であつたろうが、今は見る陰もなく荒れ果てて一見廢寺としか思われぬ古寺であつた。</p>	S F タ
<p>『海の火祭』 初出「中外商業新聞」(1927) 川端康成著 毎日新聞社 1979</p> <p>少女は黙ってアイスクリームの匙を動かしていた。彼女達は黒一色の水着に頭を黒い布できりと結んで、オレンジの花のように清らかだつた。返子の海辺で泳ぐのはこの三人だけのように見えた。それ程彼女等は海に戯れ陸をはにかむ初々しい人魚だつた。</p>	F カ